

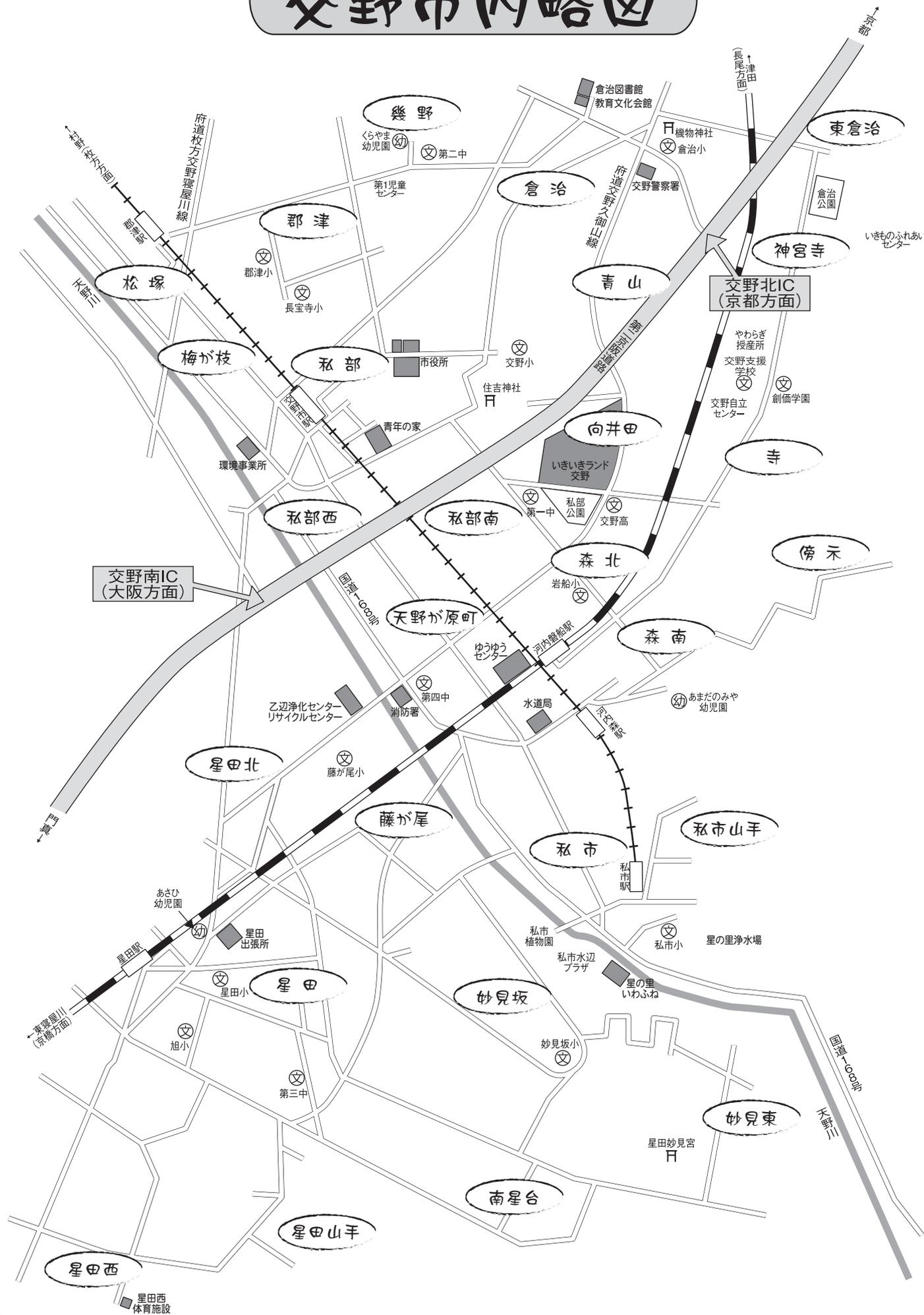
まちの名に 歴史あり

～総集編～

「まちの名に歴史あり」は、平成24年4月～26年3月まで、「広報かたの」で連載されていた記事です。市内の地名の由来や伝説などを紹介しています。

連載終了にあたり、総集編として、発行順にまとめました。記載の内容は発行時のままであり、イベント情報などは過去のものであることをご了承ください。

交野市内略図



目次

表紙		… 1
交野市内略図		… 2
目次		… 3
平成 24 年 4 月 1 日号〈郡津〉	郡津・長洲・遠坂	… 4
5 月 1 日号〈郡津〉	鳥待ち田・茶屋・生野・西久保・二ノ宮	… 5
6 月 1 日号〈倉治〉	倉治・東浦・堂前・大仏坂・論場	… 6
7 月 1 日号〈倉治〉	西口・北代・教育文化会館・機物神社	… 7
8 月 1 日号〈神宮寺〉	神宮寺・宮ノ下・石仏の道	… 8
9 月 1 日号〈私部〉	私部・城・札辻・市場	… 9
10 月 1 日号〈私部〉	蜻蛉・長砂・中町・出屋敷・馬場浦	… 10
11 月 1 日号〈私部〉	タデ・官田・上ノ山	… 11
12 月 1 日号〈私部・青山〉	才ヶ辻・焼垣内・出が城・行殿	… 12
平成 25 年 1 月 1 日号〈森〉	森・権田・平田・広子田・加賀田	… 13
2 月 1 日号〈森〉	堂山・堂ノ前・大知・卵塔・船戸	… 14
3 月 1 日号〈寺〉	今井・出垣内・南野・古宮ノ上	… 15
4 月 1 日号〈寺〉	尾上・北山・中山・南山・高塚・丑墓・日教坊・垣内	… 16
5 月 1 日号〈傍示〉	傍示・里・北浦・金剛寺・前川	… 17
6 月 1 日号〈傍示〉	峽崖・氷室・石ノ木・水神	… 18
7 月 1 日号〈私市〉	二重川・高堤・西川辺・中川辺・東川辺・井手内・中通り	… 19
8 月 1 日号〈私市〉	久保内・掛ヶ石谷・滝ヶ広・畑街道・別当	… 20
9 月 1 日号〈私市〉	池堂・谷奥・磐船・梅ノ木	… 21
10 月 1 日号〈私市〉	小路・馬場・和田坂・哮ヶ峰・羽衣橋	… 22
11 月 1 日号〈星田〉	星田・乙辺・神出来・四馬塚・千原	… 23
12 月 1 日号〈星田〉	坊龍・六路・東村・北村・西村・良村・乾村・坤村・布懸・旭	… 24
平成 26 年 1 月 1 日号〈星田〉	星田妙見・白水・紐谷・星の森	… 25
2 月 1 日号〈星田〉	垣内・上垣内・外殿垣内・大谷・小松	… 26
3 月 1 日号〈星田〉	地獄谷・鬢皿・交野山・交見・割林・阿曾谷・石ノ本・強地	… 27

まちの名に歴史あり

(郡津)



交野には面白い・変わった地名が数多くあります。その由来については、はっきりと分かっていないところもありますが、いろいろな言い伝えが残されています。

今回から、交野の昔に思いをはせながら地名にまつわるお話を紹介していきます。

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

こうづ 郡津

今は郡津と書きますが、江戸時代の中ごろには「郡門」と書いて「こうづ」と読むことが一般的でした。「郡」とは8世紀に施行された国郡里制の郡を指しています。つまり交野郡の役所があった所を意味していると伝えられています。

その中心地であった郡津神社の付近からは、白鳳時代の瓦が出土しており、役所があったのではないかと考えられています。というのも、当時は瓦ぶきの建物は、大きな寺院や役所に限られていたためです。

ながぶち 長淵

今の府営交野松塚住宅あたりが「長淵」です。北川が天野川に流れ込む手前の低湿地で、団地が造成される前は、京阪電車交野線の西側にアシの生い茂った水路や池がたくさんありました。ちょっとした大雨が降ると、この付近は水がたまり、水面が広がっていました。現在は団地が立ち並び、当時の面影はなくなっています。



松塚ふれあい館前に設置された歌碑

ここに残されている言い伝えは、色好みで文才に長けた美男子として都で評判の交野の少将が、鷹狩をしたときに交野郡司の館に泊ると、その郡司の娘が交野の少将に一目ぼれしてしまいます。

しかし、恋多き男である少将が郡司の館を再び訪れることはなく、ただ月日が過ぎていくことに絶望した娘は長淵へ身投げを決意します。

娘は自分の着物の端を引きちぎり、淵のそばを通りかかった鶺鴒の男が灯していたかがり火の墨で着物の端に辞世の歌を書きつけ、それを少将に渡すように鶺鴒の男に言い残して長淵に身を投げました。

かつきゆる うき身のあわと成りぬとも 誰かは問はん 跡の白波
『風葉集』巻14・恋4



郡津駅から枚方方向を望む(昭和39年)

来て・見て・触れてむかし探検最終回の答えは、次のとおりです。旧石器時代②、縄文時代③、弥生時代③、古墳時代①、飛鳥～奈良時代①、平安時代③、鎌倉時代③、戦国時代①、江戸時代③、明治～昭和時代②

とおさか 遠坂

文字通り遠い坂です。東高野街道が郡津の地を離れ、枚方市の村野、春日、四辻へ抜けていく道があります。出鼻橋を渡ると一段高い台地上に上がります。

昭和30年代までは、道の東側はうっそうとした竹やぶで、西側は芋畑でした。昼でも薄気味悪く、おまけに坂の上り手に、郡津と村野の墓地があり、夜などは一人で歩けないほどで、太平洋戦争前までは山賊が出たという話も聞きます。今では村野浄水場ができ、竹やぶは取り払われて枚方工業団地に、墓地周辺も住宅地になり、昔の暗いイメージはすっかり無くなってしまいました。

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)



～郡津 その2～

とりま だ 郡津神社から私部へ戻る道を、神社の南から南尾谷へだらだらと下り、直角に二度曲がると谷に出ます。

その曲がり角に、田が一枚あり、この田のことを鳥待ち田といいました。その名前から昔ここから南尾谷の湿地帯に舞い降りる鳥を、猟師がじっと待ちかまえていた様子が目に浮かぶようです。

今では、その田や南尾谷には長宝寺小学校が建ち、その面影は消えてしまいました。

ちやや 茶屋

京都から高野山へと続く東高野街道沿いには、旅人の疲れを癒してくれる休憩所がいくつもありました。なかでも郡津の茶屋は有名で、江戸時代の絵図にも記載されていました。

むかし、ある日のこと、茶屋の前に来た旅の僧侶が水を一杯ほしいといいましたが、あまりにみすぼらしい姿に誰も相手にしませんでした。気の毒に思った上茶屋の人が水を差しだすと、実は、その僧侶とは弘法大師で、お礼に清水の湧き出る場所をその人に教えた、という言い伝えが残されています。



いくの 生野

今池を取り巻いて郡津の「生野」があります。その東と南には倉治と私部の幾野があります。どちらも同じ意味で荒野・原野のことで、開墾の進まない水の便の悪い土地のことです。

しかし、逆に住宅地としては好適地といえるため、今ではたくさんの住宅地になりました。

にくぼ 西久保

東高野街道の下茶屋から東の台地一帯、郡津神社までを西久保といいます。久保というのは窪地のことで、水たまり・水が良く沸くという意味で、多くはくぼんだ小さな水田適地のことを言います。

郡津の場合は、窪地ではなく台地になっていますが、その周辺に水量の豊富な井戸が多かったため、西久保の田のほとんどが一等地でした。

にのみや 二ノ宮

明治時代までは郡津には一ノ宮・二ノ宮・三ノ宮の三つの神社がありました。現在の郡津神社は一ノ宮で、祭神は素盞鳴尊すきのおのみことで、二ノ宮は住吉神あまてらすおみかみを、三ノ宮は天照大神を祀っていました。

二ノ宮は東高野街道にあった上茶屋の西の台地上にあり、三ノ宮は大塚にありました。明治6年に二ノ宮・三ノ宮が一ノ宮に合祀されて、名前も郡津神社になりました。



郡津神社

地名探訪～郡津～

歴史解説ボランティアと、地名に残された歴史をたどってみませんか。

とき・ところ 5月22日(火)午前10時に郡津駅東口集合

コース 長洲・東高野街道(茶屋)・郡津神社・明遍寺

参加費 100円(保険・資料代)

定員 先着30人

申し込み・問い合わせ 5月1日(火)午前9時から文化財事業団(TEL 893・8111)

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)



くらじ 倉治 倉治の名前の由来には、さまざまな説があります。「クラ」は岩や断崖、または倉庫や山の鞍部を指します。崖の下の扇状地に村があることや、蔵が立ち並ぶ地であったことから倉治とついたとも言われています。

倉治では古墳時代後期の古墳群や山中に造られた寺院跡などが発見されており、また集落は現在でも江戸時代の古い町並みの面影を濃く残し、複雑に入り組む道は迷路のようです。

～倉治～

ひがしうら 東浦 旧倉治の集落一帯を東浦と呼びます。「浦」という字には畑という意味があります。「浦」は表裏の「裏」の意味も持っており、集落の東の裏手にある畑を指しています。

他にも、この地名からは倉治が防衛機能を備えた環濠集落であった可能性が考えられます。環濠集落には「浦」「代」「口」のつく地名が多くみられ、倉治にも東浦を中心に「北代」「西口」などの地名が残されています。集落は北にがらと川、南は中川に挟まれており、中を通る道は狭く、カギの手に折れ曲がっていて、防衛に配慮した造りになっています。

ろんば 論場 関西電力枚方変電所の東の谷を清水谷(しみったん)とよび、この道を進むと白旗池へ抜け、枚方の穂谷へ出ることができます。白旗池の手前には台地状になっている場所があり、ここを論場と言います。

論場と言われるようになったきっかけは、明治に津田と倉治の間で起こった水争いにあります。清水谷の水を倉治か津田かどちらに流すかという争いでした。水は生死にかかわる重要なもののため、昔は水についての争いが多く起こり、対立が激化することもありました。この水争いを話し合うために、各村の代表がここで論争を行ったことから、論場という名がついたと言われています。

どうまえ だいぶつざか 堂前・大仏坂

教育文化会館の前を南に抜けると四辻にでます。ここを堂前(どうまえ・どろまえ)と呼びます。いつの頃からか分かりませんが、倉治の入り口にはお寺があり、堂前に大仏を安置したお堂が建っていたと伝えられ、堂前と呼ばれています。

大仏坂という名前が付いているのは、私部からの参拝者がこの坂を登って来たためとも、奈良の東大寺の大仏を造る工人がこの地を通ったためとも言われています。現在では、京阪バスの停留所や交差点の名前などに大仏という名前を残しています。



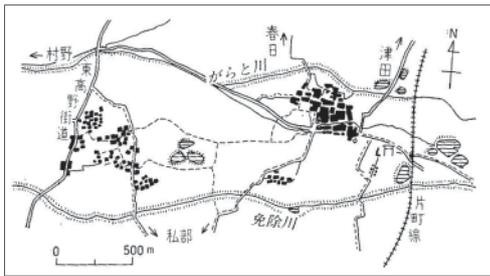
大仏坂

まちの名に歴史あり

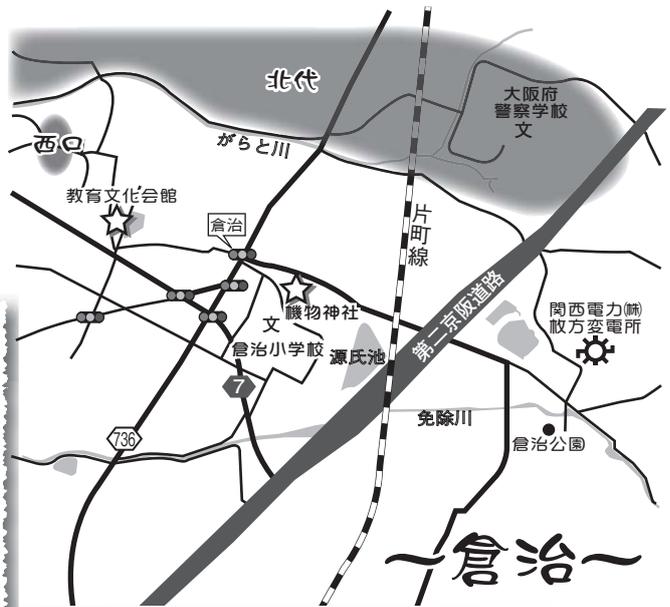
問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

にしぐち
西口 名前のお通り、西の出入口を指し、教育文化会館の西から枚方の村野への出入口を示しています。倉治の旧集落の西にあたり、木戸などを設けて村を守っていたと考えられています。

「口」のつく地名は、集落の周りを溝で囲んだ防御性の高い環濠集落に多く見られることと、明治20年に作られた下の地図をみると、集落が分散せずに一か所に固まっていることから、倉治が環濠集落であったことがうかがえます。



明治20年の郡津・倉治の集落
(■部分が集落のあった場所)



きたんだい 倉治の集落の北側、がらと川の北にある東西に細長い土地の、**北代** 関西電力枚方変電所から枚方の村野浄水場近くを北代と呼びます。

一般に「代」は「しろ」と読み、耕作地の区画のことを指しますが、倉治の北代は山麓部分を指します。これは倉治から北代をみると台地状になっているため、北代の「ダイ」は本来台地の「台」であったものが、後に「代」という字で表わされるようになったと考えられます。

歴史・文化スポット

☆ 教育文化会館

三層の塔がある西洋の中世城郭をモチーフにし、外壁にはスクラッチタイルをはめ込み、屋上先端部にはパラペットと呼ばれる装飾壁があります。建物内部にも文様細工が施されており、昭和4年の建設当時はモダンな建物でした。

この建物は交野無尽金融株式会社の社屋として建設され、昭和17年に交野町へ庁舎として寄贈されました。

その後、教育文化会館となり、歴史民俗資料展示室では市内で見つかった土器や古文書などを展示し、交野の歴史を発信しています。



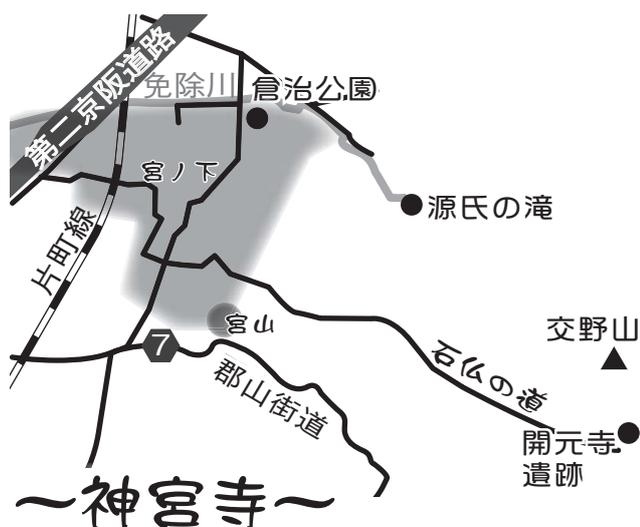
☆ 機物神社

機物神社の創建について詳しくはわかりませんが、江戸時代には村中から神主を選び、十六善神画像を守り、七夕におはらいをする神事が行われていました。現在では、七夕の日に境内に五色の短冊を結んだ笹が飾られ、七夕祭が盛大に行われています。今年の七夕祭について詳しくは3ページをご覧ください。

また、機物神社には「えぼしぎ帳」が残されています。もともとは武士の風習であった元服の儀式が江戸時代に農民にも広がり、16歳になると前髪を落として鬘を結び、烏帽子名を付けました。さらに、元服後に朝廷から官位を与えられたことになって、かんどうな官途名も付けられました。この烏帽子名と官途名を記したものが「えぼしぎ帳」で、倉治では機物神社で元服の儀式が行われていたことがわかります。

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)



じんぐうじ 神宮寺 神宮寺の集落を含む交野山麓の扇状地は一面のブドウ畑となっています。ここは明治の中ごろまでは官有地の松林でしたが、明治30年代に交野村に払い下げられ、村から南へ開墾が始まりました。そして明治40年代ごろから稲田桃が植えられるようになりました。この桃は高値で取引される甘く優れた品種だったので、明治時代の後半から太平洋戦争



昭和29年ごろの神宮寺の桃林

まで栽培されてきました。しかし、桃の収穫量は台風や戦争中の人手不足などにより著しく低下していきました。また、戦争中の食糧難により枯れた桃畑の空き地に大豆やさつまいもなどを栽培し、より現実的な食糧増産に努め、ますます桃の栽培に適さない環境となっていきました。

そこで戦後、桃に代わる新しい果樹を栽培することになり、昭和24年にブドウの試験栽培が始まりました。その試みは大成功し、「神宮寺ぶどう」としてその名を知られるようになりました。

みやのした 宮ノ下

現在の神宮寺を中心にして、北は免除川、南は郡山街道までの交野山のふもと一帯を指します。

「神宮寺」とは一般的に宮寺とも言い、神社に付属して建てられたお寺のことです。日本に仏教が入って来た時に、それを日本の神々とどう共存させるかを考えた結果、日本の神々は、日本人に理解しやすいように仏が仮の姿を現したものであるという考え方が生まれました（本地垂迹説）。そこで神社の境内や周辺に寺が建てられ、神社と寺院の両方を管理して神社の祭祀を仏式で行う社僧が置かれるようになりました。このような考え方により、奈良時代にはすでに越前国（現在の福井県）気比神宮で神宮寺が建てられています。

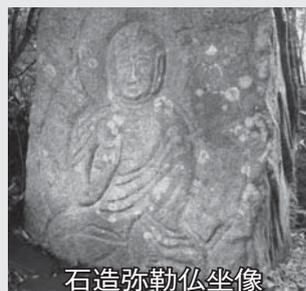
交野の「神宮寺」は郡山街道沿いの通称「宮山」と呼ばれる所にあったといわれています。宮ノ下とは、この神宮寺の下の地域という意味です。また、神宮寺と対をなしていた神社の名前は伝わっていませんが、素盞鳴尊を主神とし、末社に金比羅・稲荷・天神・春日・愛宕の神が祀られていて、明治8年に機物神社に合祀されました。

せきぶつ みち 石仏の道

神宮寺の集落に向かう登山道は「石仏の道」と呼ばれています。

鎌倉時代から室町時代にかけて山岳仏教が盛んになった時代、交野山には岩倉開元寺という大きな寺院があったといわれています。その参道に参拝者を見守るように多くの石仏が彫られ、石仏の道となりました。

石仏の道にある石造弥勒仏坐像、磨崖三尊像、石造阿弥陀如来立像、磨崖阿弥陀三尊像、石造二尊立像の5点の石仏は廃岩倉開元寺石仏群として、市指定文化財となっています。



石造弥勒仏坐像

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

きさべ 私部

私部はもともと「きさきべ」あるいは「きさいちべ」と読みました。

『私』という漢字には、「愛されるもの」という意味があり、中国の漢の時代に、后に関する仕事をする役所を「私府」、そこで働く人々を「私官」と言いました。そのため、日本でも後の世話をする人などを私部と言うようになりました。

日本書紀に、敏達天皇の皇后（のちに推古天皇）のために私部を置く（577年）という記述があります。交野の私部も、この時に皇后のために働く人々、として定められたのではないかと考えられています。その後の時代になると、私部、が住むこの土地自体を私部と呼ぶようになりました。

ふだのつじ いちば 札辻・市場

私部城の南側、無量光寺周辺を札辻といい、無量光寺の東側を市場と呼びます。

この地域は、私部城の城下および無量光寺の門前町として発達し、江戸時代には私部に代官がおかれ、無量光寺から代官屋敷にかけては、私部村の中心地域となっていました。

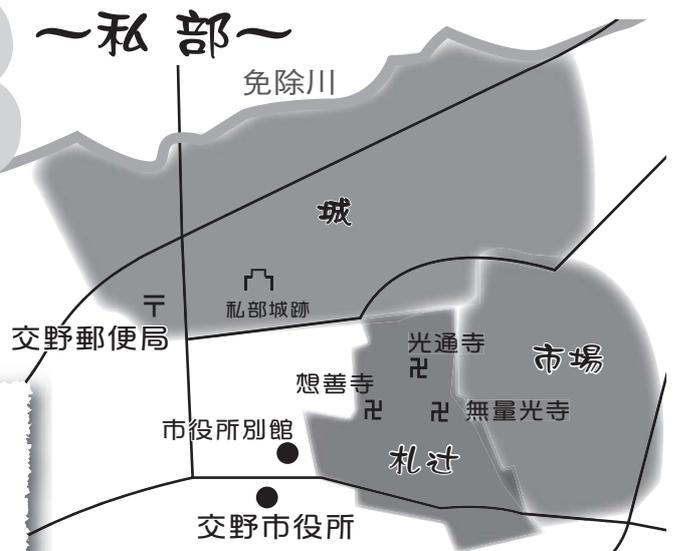
私部は農村でありながら商業も活発な町だったので市がたつてにぎわい、無量光寺の門前は人の往来が多いところから、高札を立てる絶好の場所でした。

高札とは、木の板に民衆が守るべき法やお触れを書いて、人通りの多いところに掲示したもので、平安時代から明治時代初期まで使われていました。札辻とはこの高札が掲げられた場所のことです。

札辻で掲げられた「キリシタン禁制」（1711年）の高札は、現代に残されており、歴史民俗資料展示室で展示されています。



キリシタン禁制の高札



しろ 城

交野郵便局から東側の台地一帯を「城」といい、この中に私部城がありました。

私部城は河内国の守護代も務めた安見氏によって戦国時代に建てられ、織田信長の活動を記録した「信長公記」にも交野城という名前で登場します。信長公記には、戦国大名の松永久秀が私部城を攻めた際に、織田信長が兵を派遣して守ったと記されています。

私部城は、現在間近でみることのできる良好な平城（平地に築かれた城）の跡として府内で唯一の歴史資産です。



私部城の本丸跡

歴史探訪～倉治～

とき・ところ 9月25日(火) 午前10時に倉治図書館前集合

コース 仁平川の洗い場・機物神社・源氏の滝・石仏の道

参加費 100円(保険・資料代)

定員 先着30人

申し込み・問い合わせ 9月3日(月) 午前9時から文化財事業団(TEL 893・8111)

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

～私部～



ながさ 長砂

「長い砂」が縮んで「長砂」と呼ばれるようになりました。

現在は、大きなマンションや商業施設の建ち並ぶ交野の中心地ですが、昭和40年代までは大きな米作地帯でした。

私部で一番低い土地で、天野川や免除川が氾濫した時に流れてきた砂や粘土が堆積した泥田であったため、村人たちは田植えや稲刈りに苦勞していました。また、この付近は天野川に堆積した土砂で川底が周囲の土地よりも高かったため、長雨が続きと水が川に流れずに、一面が泥の海となり、堤防が決壊し洪水になることもしばしばでした。



天野川堤防から梅が枝団地建設前の風景 (昭和42年)

とんぼ 蜻蛉

「かげろう」ではなく「とんぼ」と読む珍しい地名です。トンボには「飛ぶ穂」を語源とする説があり、別名を「秋津」といい、秋の精霊で五穀豊穡のシンボルとされています。また「日本書紀」に「そらみつ倭の国を 蜻蛉嶋 (あきづしま) といふ」とあり、蜻蛉には大和地方をさす言葉としての意味もあったと考えられます。

私部は敏達天皇の皇后領であったことから、この地で収穫された米が飛鳥の皇后に差し出されたことが想像されます。米作地帯であり、大和とのつながりのあったこの地にふさわしい名前といえます。

なかつちよ でやしき ばうら 中町・出屋敷・馬場浦

交野市駅から交野小学校まで、現在も長い一本道が続いています。この一本道を中心にして両側の地域が中町、出屋敷、馬場浦と呼ばれていました。

先月号で紹介した無量光寺周辺の札辻・市場が江戸時代に栄え、中町や出屋敷はこれらの地域が発展してできたと言われていています。地形がちょうど私部の中心にあたることから中町、私部城の武士たちが私部城周辺に屋敷を構えたことから出屋敷、軍馬の訓練場があったことから馬場浦と、それぞれ名付けられたのかもしれませんが。

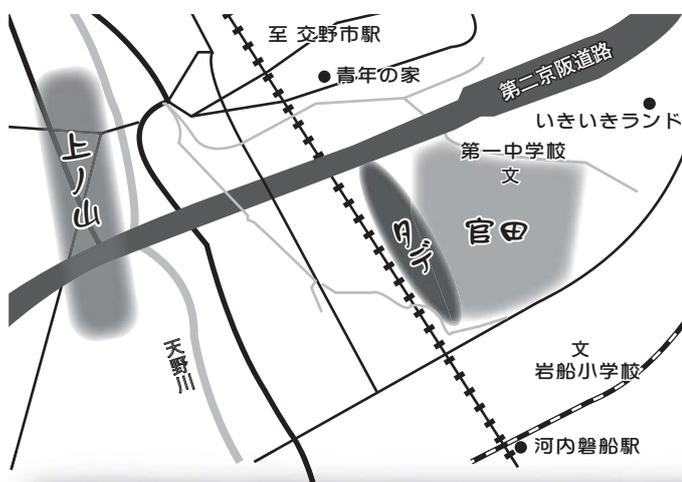
特に馬場浦は、札辻・市場の集落の外側にあたり、防御用の出城のような役割を果たし、竜王山あたりから攻めてくる敵兵を防御する重要地点でもありました。

これらの3つの地域は、私部の中心地域であった城や札辻、市場といった地域と密接に関連し、形成されていった地域と言えます。

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

～私部～



うえんやま 上ノ山

天野川にかかる逢合橋を西南に越えた一帯を上ノ山と呼びます。

上ノ山は京都から高野山に通じる東高野街道と、交野山の山際(根)を沿うように続く山根街道の合流地点であり、現在は宅地となっていますが、以前は竹やぶが茂るこんもりとした丘でした。この合流地点の近く(現在は枚方市域)には、私部村の人々が建立した上ノ山地蔵が立っています。

またこの辺りは、元亨元年(1321年)、摂津国の法明上人が石清水八幡宮に向かう途中に、八幡宮から迎えにやって来た社人から貴重な曼荼羅の掛け軸を受け取った場所と言われています。これに大喜びした法明上人は、その掛け軸を近くの松の木にかけて念仏を唱えながら踊ったという伝説があり、この地域は「本尊掛松跡」と呼ばれ、その周辺地域を「上人松」や「上ノ山」と呼ぶようになったと言われています。

タデ

私部の落合橋から私市へ一本道が走っており、この付近をタデと呼んでいます。落合橋から私市道を南へ少し行くと「大門」と呼ばれる田があり、ここは私部の豪族であった北田久左衛門尉好忠が大和郡山城主の筒井順慶と争った場所だと北田家系図にあります。

この争いで私市方面からの攻撃に備えるため、この地域に出域的な館があったのではないとも言われ、館がなまって「タデ」と呼ばれたという説があります。

かんてん

官田

現在の第一中学校近くの田んぼが広がる地域一帯を官田と呼びます。

官田という地名の由来は二つあり、一つはこの場所が周辺の地形よりも一段と高く、川も夏枯れになることから、乾田だったのではないかという説です。

また奈良時代には、天皇がお食べになるお米を作っていた田んぼを官田といい、それが地名になったと言われる説もあります。現在も田んぼが多く残る地域ですが、ここのお米を奈良時代の天皇が召されていたのかもしれませんが。



落合橋からの風景。中央の一本道が私市道で、道路より右側の田が「タデ」、左側が「官田」

歴史探訪～私部～

とき 11月27日(火)午前10時

集合 交野市役所別館前

コース 私部城跡—光通寺—無量光寺—北田家住宅—住吉神社

※ガイドが付き添います。施設は外からの見学となります。

参加費 100円(保険・資料代)

定員 先着30人

申し込み・問い合わせ 11月1日(木)午前9時から文化財事業団(TEL 893・8111)

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

やけがいと 焼垣内

現在の青山3丁目にあたる地域を焼垣内と呼びます。この地域は免除川がたびたび氾濫し、荒れ地であったため、村人が土砂で垣を作り、それで囲って開墾したと言われています。

土砂は水持ちが悪く、日照りが続けば作物が枯れてしまう過酷な土地であったため、この名が付いたのかもしれませんが。

この地域では旧石器時代から中世までの幅広い時期の遺跡が発見され、出土品には矢尻や須恵器などの遺物が多く出土し、古墳や集落が存在したことをうかがわせます。

～私部・青山～



でがしろ 出が城

青年の家付近に畑中というバス停があり、ここから北の地域を出が城と呼んでいます。江戸時代には「土居が城」と呼ばれ、それがなまって出が城と呼ばれるようになったと言われています。

土居とは館を防備するために囲った土の壁のことで、これが後に城郭へと発達していきます。この辺りは、昭和40年代までは壕をめぐらした建造物が部分的に残っており、私部の豪族が住んでいたことが分かりました。また、この付近から瓦や土師器が発掘され、豪族が住んでいた時代は室町時代ではないかと推測できます。

さいがっじ オケ辻

現在の交野小学校から北側周辺をオケ辻と呼び、私部村の東はずれにありました。

昔から村はずれには、悪霊や疫病が村に入りこまないように、道の片隅に「道祖神」という石仏や地蔵を祀ることがあります。道祖神は「さいのかみ」とも呼ばれ、私部村の出入り口にあたる辻に道祖神が置かれていたことから、オケ辻と呼ぶようになりました。

現在も交野小学校の正門近くに、明治40年ごろに作られた伏拝神と小さな祠を見ることができます。



交野小学校の正門近くに建つ祠(手前)と、二月堂と刻まれた伏拝神(奥)

ぎょうどの 行殿

焼垣内の西、オケ辻より北の免除川に沿った地域を行殿と呼びます。

地名の由来は二つあります。一つは、この地域一帯が経田(読経料として寺へ寄進された荘園)であり、それがなまったという説です。この荘園が寄進されたお寺は光通寺だと言われています。

もう一つは、この地域の免除川付近にため池があり、そこに行者が水浴をして修行した堂があったと言われています。このため池は行堂の池と呼ばれ、現存しています。その行堂が「行殿」となったのかもしれませんが。

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

～ 森 ～



もり 森

この地域が「森」という大字で呼ばれるようになった時期は定かではありません。伝説では平安時代、石清水八幡宮から派遣された役人の森宮内小輔が、当時荒れていた須弥寺を再興したため、「無垢根」と呼ばれていたこの村を「森の村」と呼ぶようになったと伝わっています。

森地域は多くの小字があり、細かく分かれているのが特徴です。これには理由があり、江戸時代、この地域を治めていた山城国淀城主の永井家による年貢の取り立てが厳しかったため、村人たちは小字を多くし、田を細かく分け、収穫が少ないように見せたという言い伝えがあります。

須弥寺 「森」の集落



河内森駅付近の道路分岐点の写真(地図中の☆印)。上が現在、左は昭和30年代。

ごんでん ひらた ひろこだ 権田・平田・広子田

権田は河内磐船駅を含んだ南北にのびる場所で、`墾田、が地名の由来とされています。交野は石清水八幡宮の荘園があり、付田と呼ばれる田んぼを開墾する際に、拡張した田んぼが権田だと伝わっています。

また平田は、権田の東側に隣接し、岩船小学校と開智幼稚園の間にあたる場所です。扇状地から平地となる境目の土地で、現在は商業施設などが建っていますが、昔は少し傾斜がある水田地帯でした。

広子田は権田の南側、河内森駅から河内磐船駅に向かう道の東側にあたる地域です。「開田」から転じた地名と考えられています。権田、平田が開墾された後、一段高い斜面に開墾したと考えられます。

かがた 加賀田

加賀田は、森の集落付近から始まる扇状地が終わる平坦地に位置します。加賀とは、平坦地やすり鉢形の低地という意味があり、ここでは平坦地を意味した地名であると考えられます。

この地域は、夏の日照りが続くと水不足となり、江戸時代の中期以降、私市の池堂にある、ため池の水を加賀田へ引いていました。これを加賀田用水と呼び、森地域はそのお返しとして、私市に2斗5升(約37.5^{キロ})のお米を毎年納めていたそうです。

この用水は11月号で紹介した私部の官田にまで流れ、利用されていました。

まちの名に歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

おち 大知

須弥寺の北側から交野高校グラウンド西側まで、階段状の田が連なった場所を大知と言います。

「おち」とは、落ちるや崖といった意味で、堂ノ池付近から大知の方へと順々に土地が低くなり、大知は崖状の地形となっており、それが地名の由来となっています。

現存はしていませんが、大知には上から流れてくる水をためる「大知池」がありました。このため池の水は、船戸付近を西へと流れ、官田地域(私部)にかんがい用水として利用されていました。

～ 森 ～



ふなと 船戸

岩船小学校の東側の道が府道久御岫線と交差する場所を船戸と言います。船戸は川や海岸の渡し場という意味と、道祖神という意味があります。

この地域の船戸は道祖神を意味していると考えられます。森村の外れにあたる地蔵筋から出入りする旅人の安全や日頃の無病息災、家内安全を祈ったことでしょう。

どうやま どうのまえ 堂山・堂ノ前

須弥寺と観音堂が建っている地域を堂山・堂ノ前と言います。この地域は、須弥寺を中心に森地域の中心地でした。

この須弥寺の始まりについては、江戸時代の「須弥寺縁起」で、平安時代に弘法大師が草堂を建てたことによるとありました。しかし、平成9年の発掘調査で須弥寺から奈良時代の瓦が多数出土し、寺伝より年代が古いことが判明しました。

奈良時代に瓦葺の建物と言え、寺院か役所に限られ、この地域の交通の便などを考えると寺院であったと考えられます。須弥寺の



須弥寺



奈良時代の瓦

存在は、奈良時代にこの地域の人々が立派な瓦葺の建物を建造する力を持っていたことを証明しています。

らんとう 卯塔

森地域の南東の谷に入った地域を卯塔と言います。卯塔とは、主に僧侶の墓塔として使われる石塔のことを言い、塔身が卵形をしていることからそう呼ばれています。そこから転じて墓所そのものを卯塔と呼ぶようになりました。

また一方で、村人の言い伝えで卯塔は乱闘からきているという説もあります。これは鳥羽伏見の戦いで、幕府方の敗残兵が交野方面に逃れて来たため、村人は災難を恐れ、この谷に逃げ込んで、難を逃れたことから付けられた地名とされています。

歴史探訪 ～森～

とき・ところ 2月26日(火) 午前10時に河内磐船駅南ロータリー集合

コース 須弥寺・かえる石・旧磐船村役場・川東神社

参加費 100円(保険・資料代)

定員 先着30人

申し込み・問い合わせ 2月1日(金) 午前9時から文化財事業団(TEL 893・8111)

まちの名に歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

いまい 今井

交野高校北側の向井田あたりを今井と呼びます。中世の鎌倉・室町時代頃まで寺の集落はこの地域にあったと言われています。その理由は巽山たつみやまという小さな丘（現在の泉団地付近）の名前にあります。「巽」は方角で言う南東にあたり、巽山は今井から見ると南東にあることから、今井の集落に住んでいた人々が名付けたのでしょう。

しかし、集落の背後にあった竜王山などは風化の激しい花こう岩地帯で、大雨などで土石流が起ると、一帯に大きな被害をもたらしました。今井の人々は比較的被害の少ない尾根筋の小高い地域に移り住んだのか、集落は無くなりました。その後、今池から水を引いて水田となり、寺でも有数の美田となりました。

でがいと 垣内は「かきつ」から転じて「かいと」と読むようになりました。

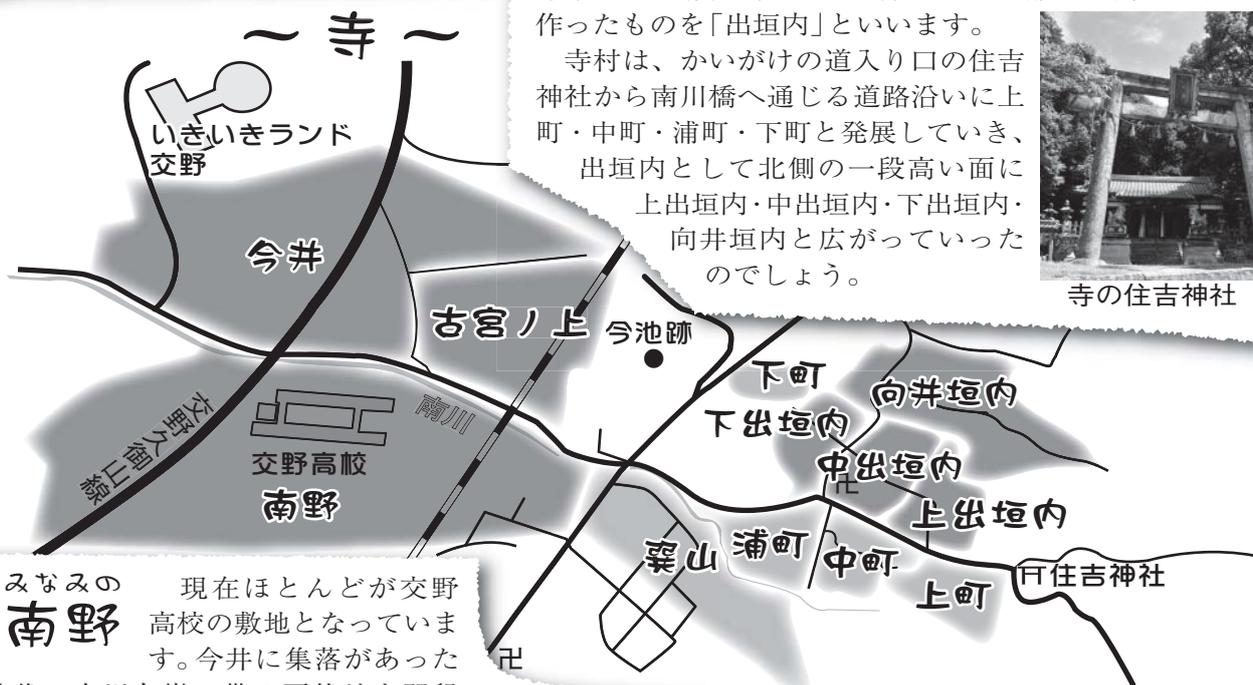
本来の意味は、耕作予定地を垣で囲んだ地域のことで、平安時代初期から文献に地名として現れます。多くの地域では畑ですが、なかには居住者のいる土地いがいと（居垣内）もありました。

この垣内が地域の最少自治単位となっているところもあり、この場合、元となる村などから離れて外に垣内を作ったものを「出垣内」といいます。

寺村は、かいがけの道入り口の住吉神社から南川橋へ通じる道路沿いに上町・中町・浦町・下町と発展していき、出垣内として北側の一段高い面に上出垣内・中出垣内・下出垣内・向井垣内と広がっていったのでしょう。



寺の住吉神社



みなみの 南野

現在ほとんどが交野高校の敷地となっています。今井に集落があった時代に南川左岸一帯の扇状地を開墾し、南野と呼ばれるようになりました。

ここからは5世紀代の古墳が5基発見され、交野車塚古墳群と名付けられました。特に東車塚古墳は、埴輪の形状や副葬品の種類から古墳群の中でもっとも古く、被葬者は肩野物部氏だと考えられています。東車塚古墳は府指定の史跡となり、出土品も府指定有形文化財となっています。



東車塚古墳の出土品

ふるみやのうえ 今井の中には「古宮」という地名が残されていて、今井に集落があった時代に、祖先を祀る神社があったと考えられます。今井の集落が現在の寺地域に移動し、住吉神社が祀られるようになり、古い神社が無くなったことから古宮と呼ばれるようになり、今井よりも高い位置にある土地を古宮ノ上と呼ぶようになったのかもしれない。

ふるみやのうえ 今井の中には「古宮」という地名が残されていて、今井に集落があった時代に、祖先を祀る神社があったと考えられます。今井の集落が現在の寺地域に移動し、住吉神社が祀られるようになり、古い神社が無くなったことから古宮と呼ばれるようになり、今井よりも高い位置にある土地を古宮ノ上と呼ぶようになったのかもしれない。

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

たかつか うしばか 現在、関西創価学園
高塚・丑墓 の敷地がある地域一帯
を高塚と言います。

この場所は、学校が建設される以前は小高い丘で、6世紀頃の群集墳があったことが地名の由来になっています。「平安時代に惟喬親王がお見えになった」や、「鷹の首が埋められていた」ため、地名になったという言い伝えもあります。

丑墓は、寺地区の旧集落であった今井の北北東にあたり、丑は方角を表しています。今井の東には高塚があり、今井の住人は古代の古墳が多くあった高塚付近に墓地を建てたと推測できます。

につきょうぼう 日教坊は竜王山の麓
日教坊 に位置し、「尼教坊」と
書いたとも言われています。

竜王山は山岳仏教の修験の場であり、山頂には八大竜王社を祀る小さな祠があります。日教坊は、その修験者や神官たちの宿坊があったことから名付けられたと言われています。



竜王山山頂の竜王石と祠

「文化財友の会」の会員募集

平成25年度の会員を募集します。歴史に興味がある人はぜひご参加ください。

内容 ①「文化財だより」の配布 ②現地説明会・指定文化財公開・市民文化財講座・出版刊行物・バス見学会の案内

申し込み・問い合わせ 年会費1,000円を持って社会教育課文化財係

※4月から、文化財事業団は社会教育課文化財係となりました。

おがみ 尾上

尾上は北山の山麓にあたる丘陵地で、倉治と私部の境界に位置し、各地域の墓地が集中している場所です。

また、この付近はわき水が豊富で、ため池から田に引く水を確保するため、寺・私部・倉治でもめ事が起こるほど、重要な場所でもありました。

きたやま なかやま みなみやま 北山・中山・南山

郡山街道より南の山地部分で、寺地域を囲むように北から北山、中山、南山へと続いています。

南山には、市内最古の古墳と言われている鍋塚古墳があり、弥生時代の住居跡も発掘されています。この地域に古い時代から人が住んでいたことが分かります。



かいと 垣内

上町の南東で、棚田と段々畑となっている場所を垣内と言います。

垣内とは、これから開墾する土地を垣で囲んだ場所を意味しますが、今回紹介する垣内は、既に開墾された土地を垣で囲んだものです。

この地域の棚田は見事なもので、昔に比べて耕作地は減少していますが、現在も美しい風景が残っています。

※イベント情報は発行時のものであり、現在は行っていません。

まちの名に歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

ほうじ 傍示

傍示とは、札を立てて国境を示したことから付けられた地名で、交野市の傍示は河内国と大和国の国境にあたります。

傍示には交野から奈良へ通じる「かいがけの道」があり、大和と河内を結ぶ重要な通りでした。

また、竜王山の麓には多数の遺跡や古墳群が確認されており、古代からこの道が頻繁に利用されていました。



かいがけの道

この傍示地域に住む人たちの多くは、伊丹姓を名乗っています。言い伝えでは、天正年間(1573～1592年)に摂津国の伊丹城主であった伊丹親興が織田信長に滅ぼされ、残った伊丹一族が交野まで逃げ、この地を安住の地として、住み続けてきたと言われています。

さと きとら 里・北浦

里は、現在の傍示集落から南東部に位置します。

伊丹一族が傍示に辿り着くまでに、この土地で生活していた人たちが、この地域を開墾したと考えられます。

傍示は里地域より東側を「東傍示」と呼び、生駒高山を指し、西側を「西傍示」と呼び、これが交野の傍示にあたります。

また、この里の北側を北浦と呼び、里の水田が開かれた後に北山の斜面が開墾されました。浦とは、里の裏側にあたる土地を意味し、北浦と名付けました。読み方は「きたうら」がたまって、「きとら」になったと考えられます。

～ 傍示 ～



こんごうじ 金剛寺

生駒・葛城連峰はかつては役行者の修行場であり、山岳仏教が盛んになる平安

時代には各修行場で宿坊が置かれました。



阿弥陀如来立像

鎌倉時代、山岳仏教の修行場を書いた「諸山縁起」には北峰の宿として「石船、師子石屋、金剛、甲尾」と記され、この金剛が傍示の金剛寺にあたります。

竜王山から東には台地状の地形が広がり、寺院のものと思われる瓦が出土しています。国の重要文化財である阿弥陀如来立像(快慶作)が八葉蓮華寺に安置されていることは、金剛寺が修行場として関わっていた可能性を示唆しているのかもしれませんが。

まえがわ 前川

かいがけの道を登りきった平坦地を前川といい、現在の傍示の水田はすべてこの前川に広がっています。この場所の一角を流れる谷川を前川と言い、これが地名の由来になっています。

この川は、前川の北東にある北浦、里、垣内の地域から続き、最終的にこの地域に水が集まってくるようになっています。



前川の水田地帯

かいがけ 峡崖 寺村から傍示へ上がる急な崖道です。現在は、寺村の住吉神社から急な尾根道を登りますが、室町時代以前は、その南側の谷を通っていたと考えられます。それは、前川の先で田の切れるところにある、通称「ごみの木地蔵」と呼ばれる室町時代の地蔵が理由です。



ごみの木地蔵

この地蔵は、現在の「かいがけの道」に正面を向いておらず、その前の谷の方を向いて立っているのです。おそらく昔の道は、この谷を通っていたのではないのでしょうか。

ひむろ **氷室** 一般に「氷室」とは冬に氷を作り、夏まで貯蔵しておく倉庫のことです。

傍示の村を少し東に上がったところに小高い丘があり、それを氷室と呼んでいます。

傍示は海拔 250 くらいあり、冬は相当に寒くなります。そのため、氷室の西北側に穴を掘り、水を入れておけば夏まで保存できそうな雰囲気があります。



昭和 53 年頃の氷室(傍示)

また、傍示の八葉蓮華寺の山号も氷室山と言います。

まちの名に歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)



いし き **石ノ木** 生駒山地は花崗岩地帯であるため、露出している大岩が多くあります。

そのため、磐船神社や星田妙見宮のご神体をはじめ、交野山の観音岩などの巨石信仰が見受けられます。傍示の石ノ木でも、露出した大岩が村人に畏怖の念を起こさせ、信仰の対象となったのかもしれません。

石ノ木のある場所で木を切ると、必ず腹痛をおこしたという昔話が傍示には残っています。

すいじん **水神** 寺村の東側の谷を上がって行くと、北浦に出ます。そこに水神の名がつく田が2か所ありました。どちらも水がよく湧き、よくたまる田だったそうです。

山の水がコンコンと湧き出すことにより、夏の日照りでも田に水が注がれ、農作物の豊かな実りが約束されることから、水の神への信仰が生まれたのでしょう。



水神への道(昭和 49 年頃)

また、山中にある傍示の集落では、地下から湧き出る水は、飲料水にもなっていました。人々の生活にとって欠かすことのできない神様をお祀りした祠がありましたが、現在ではなくなっています。

歴史探訪～寺地区～

とき 6月28日(金)午前10時、いきいきランド交野集合

コース 交野車塚古墳群・山添家住宅(外からの見学)・住吉神社など

定員 先着30人

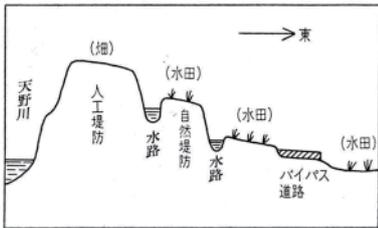
申し込み・問い合わせ 6月3日(月)午前9時から社会教育課文化財係(TEL 893・8111)

まちの名に歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

ふたえがわ 天野川の東側に、南北に細長く自然堤防と人工堤防がありました。これはもともとあった天野川の自然堤防の上に、人工の堤防を築いたもので、人工堤防の面は畑として、自然堤防は田として利用されていました。

そして堤防の下も水田にするために、水路を設けていたので二重川と言う地名が生まれました。近年では宅地化が進んだため、田畑が消えて、二重川の面影も見られなくなりました。



二重川断面模式図

いでのうち 井手内 いんでん もとは院田と書きましたが、呼び方が詰まって「いで」になったと言われており、私市の村の中を南北に通る道路より東側の水田地帯を指します。この辺りは私部と同様に、天皇の后である豊御食炊屋姫命(のちの推古天皇)のために働く人たちの土地で、後に「私市」と呼ぶようになったと言われています。



井手内 (昭和 50 年)

獅子窟寺に残る江戸時代の記録によると、鎌倉時代に亀山上皇が自らの病氣平癒祈願のため、獅子窟寺の薬師如来に参詣しようとしたが、険しい山寺であったため、麓に休憩宿舎を造らせました。ここが後に千手寺となり、その寺のための田、つまり亀山院の田という意味で院田という地名が生まれたとされています。

～ 私市 ～



たかづつみ 高堤 二重川の北側、学研都市線を越えた付近を高堤と言います。江戸時代、天野川の氾濫に耐えかねた私市の人々は堤防を築いて氾濫を防ぎました。しかし、天野川に流れ込む土砂が多く、川床が高くなるため、それに応じて堤防もさらに高くなっていきました。

にしかわべ なかかわべ ひがしかわべ 西川辺・中川辺・東川辺

現在は天野が原町 2・4・5 丁目の住宅街となっていますが、昔は天野川が氾濫し、水があふれる低い土地でした。ここは天野川の扇状地の末端にあたり、湧き出る水と天野川の水とで、一面が水田地帯でした。

なかどお 中通り 天田宮から西の四角い盆地状の低地を中通りと言います。私市の水田の中心ではないかと考えられています。

そして中通りから、北の通りを佃通りと言います。佃とは、荘園を管理する荘官が持っていた直営田のことで、収穫物を荘官が全て得ることができ、荘官は自らの直営田を増やしていきました。この地域にも佃があったために、佃通りという名前付いたのかもしれませんが。



中通り付近 (昭和 49 年)

くぼのうち 「久保」は、くぼんだ
久保内 土地から転じて、水の湧き出る土地も意味するようになりました。私市のほかに、森と郡津にもこの地名があります。

私市の久保の範囲は広く、天野川から東の台地上の松宝寺池付近までを指します。その中心は若宮神社周辺で、山からの湧き水が豊富で田の水が枯れることのない、一等地の水田となっています。



まちの名に歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

かけいしだに 月輪の滝から、尺治谷を
掛ヶ石谷 抜け、天野川と合流する尺治川の北の崖から上一帯を掛ヶ石谷と言います。その由来は、腰を掛けるのにちょうど良い岩があったとか、有名な人が腰をかけた岩があったなどと言われています。

これは、獅子窟寺で弘法大師が修行したという言い伝えがあるため、この有名な人とは、弘法大師のことではないかと、地元では言われています。また、新御幸橋から北に下る坂を「大師」と呼んでいます。

はたかいどう
畑街道 天野川が、山から私市の集落に出たところにあたります。現在、天野川は崖下を流れていますが、かつては土砂の流入が激しく、土砂の堆積と川の氾濫による荒地でした。開墾により、多くの土地が畑に変わりました。そのため本来なら「畑垣内」が記す場所ですが、磐船街道沿いにあるため、「垣内」が「街道」と記されるようになったのかもしれませんが。

※垣内……新しく開墾した土地

たきがひろ
滝ヶ広 月輪の滝の下に、少し広い平らな土地があり、祭壇を設けて大勢の人が集まる祭礼を行うのに適した場所です。

昭和45年の宅地造成の際に、ここから飛鳥から奈良時代に作られた「埴仏」と、平安時代初期のお金である「富寿神宝」50枚と、人骨が納められた壺が発見されました。



埴仏



富寿神宝と壺

べつとう
別当 別当には、さまざまな意味がありますが、大きな寺では、寺務を統括する最高責任者を別当と言いました。

私市の別当はゴルフ場の北にあり、月輪の滝から上がってきたところで、ここに獅子窟寺の別当の住む庵があったのかもしれませんが。

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

いけのどう
池堂 江戸時代、私市の池堂から、森の加賀田へ水を引いていたため、森は私市に二斗五升のお米を毎年納めていました。このことは享保13年(1728年)の池堂池工事の際に、森と私市が交わした証文に残されています。
また、池堂という名前から、ここにはお堂のようなものがあつたのかもしれない。



たにおく
谷奥 獅子窟寺が建っている一帯を谷奥といいます。私市と森からは、山の中にあたり、谷の奥に立派な寺院が建っていることから付けられたのでしょう。そのため、谷奥上覚・谷奥大門原・谷奥狐谷・谷奥狸谷など、獅子窟寺の寺域と思われる小字には谷奥が付いています。

いわふね
磐船 磐船神社一帯を磐船と言ひ、物部氏の先祖である饒速日命が、磐船に乗って哮ヶ峰に天降ったという神話があります。



磐船神社

現在哮ヶ峰は、ほしだ園地のクライングウォールとなっており、磐船は、磐船神社のご神体と言われています。この巨石には「加藤肥後守」と彫り込まれており、江戸時代初期、大坂城を再建するとき、この巨石を石垣として使おうとしました。しかし、石工が岩を割ろうとしたところ、岩から血が流れ出たため、皆が恐ろしがってそのまま放置されたという言い伝えがあります。



加藤肥後守拓本



御前弘神人の様子

昔、神功皇后が天王(現在の京田辺市)から大和に行く途中に、磐船神社の手前で休憩して食事を取った後、皇后が捨てた梅干の種が芽を出し、立派な木になったという言い伝えがあります。また一方で、宇佐八幡から山城へ八幡様をお送りしたときに、この街道端で休憩し、八幡宮までの道のりがあと少しになったので、杖にしていた梅の木を、地面に突き刺して行きました。その杖から芽吹いたのが、この梅の木だと言われています。

うめのき 梅ノ木



「石清水八幡宮」
石灯笼

私市から磐船街道を登っていくと、天野川の西岸にほしだ園地の散歩道が続き、それが途切れる所が、昔の石切り場の跡です。ここから左に大きくカーブする坂の上がり際、道の左側に「石清水八幡宮」と彫った石灯笼があり、その横にかつて梅の古木がありました。
毎年9月15日、石清水八幡宮の放生会(現在では石清水祭)に、私市の人々が、御前弘神人として笏と共に、この梅の枝を持って道を払いつつ行列の先頭を歩きます。
この梅の木については、いろいろな伝承があります。

まちの名に歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係
(TEL 893・8111)

ぼうりょう 元々は「坊領」という漢字だったと思われま
坊龍 す。坊領とは寺院などの荘園のことで、全国に地名として残っています。坊龍も室町時代に石清水八幡宮の荘園であった可能性が高い土地です。

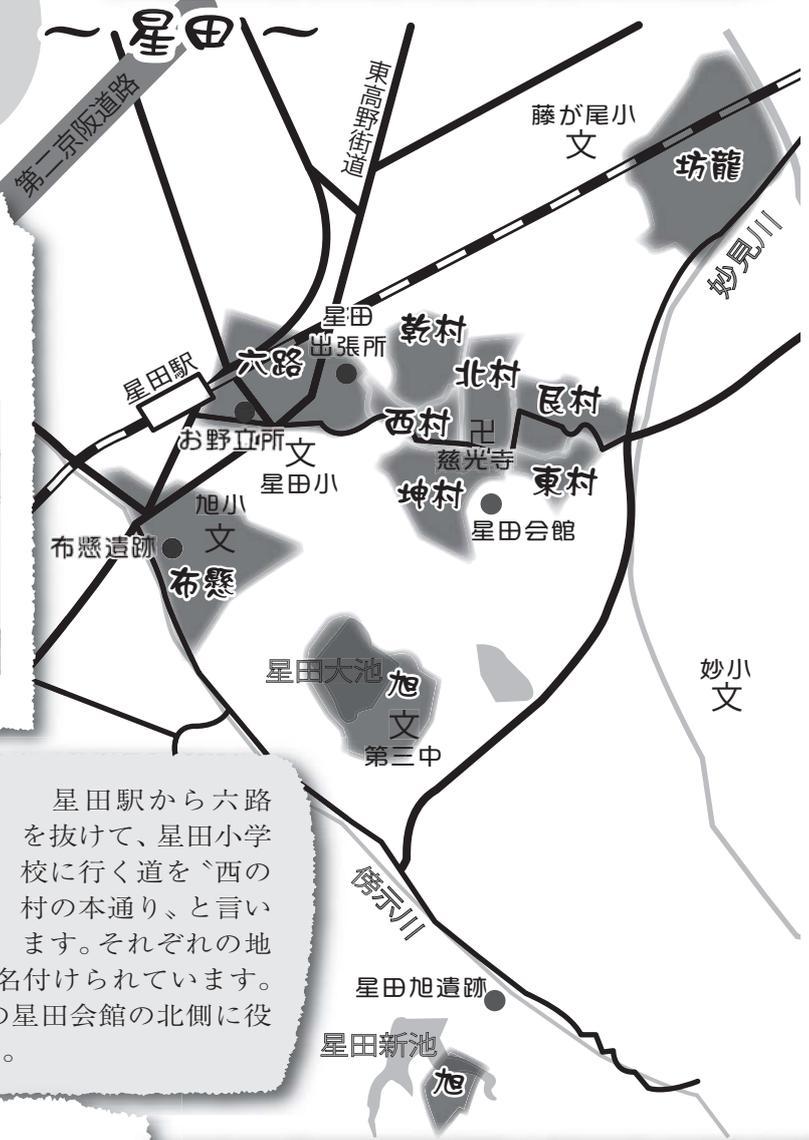
現在、南側は団地ですが、妙見川と天野川が合流する付近にあり、水田に適した土地でした。

ろくろ 六路は、道路が分かれる分岐点を意味していると考えられます。ここは東高野街道を中心として、星田・寝屋・高田などへ入る道と寝屋川に続く山根街道への分岐点となっています。

また、ここには「お野立所」の碑があります。これは大正3年11月16日の陸軍特別大演習が行われた際に、大正天皇が行幸されたことを記念したものです。



お野立所の記念碑



ひがしむら きたむら にしむら
東村・北村・西村・
うしとらむら いぬいむら ひつじさるむら
良村・乾村・坤村

星田駅から六路を抜けて、星田小学校に行く道を「西の村の本通り」と言います。それぞれの地名は星田村の中心集落にあたり、方角から名付けられています。

これら地名の中心は慈光寺付近です。現在の星田会館の北側に役場があり、村の政治の中心となっていました。

のうかけ 星田大池の西にある小高い丘の下から、旭小学校・大谷橋にかけての平らな場所です。傍示川の自然堤防の東側にあるため、水田に適した土地でした。

昭和54年に、旭小学校の南側から、数mの範囲内で、10cmほどの深さから旧石器時代の石器128点が集中して発見されました。



布懸遺跡試掘の様子(上)と、出土した石器(下)

あさひ 星田大池と第三中学校すべてを含む地域を旭と言います。

また、傍示川の上流の星田新池付近にも旭という地名があり、星田旭遺跡からは縄文時代の遺物も出土しています。



星田旭遺跡出土遺物

これらのことから、傍示川に沿って、縄文時代の人々が集落を作り、狩猟採集生活をしていただことが分かります。



まちの名に 歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係
(TEL 893・8111)

ほしだみょうけん

星田妙見

山腹や山頂に巨岩がある山には、神社や寺院が建てられることがよくあります。これは、古代の自然崇拝からきたものだと考えられます。

星田妙見の山も元々はこうした自然崇拝の対象であったと思われます。星田の妙見山のご神体は八丁三所の一つで、別名「織女石」とも言われ、七夕伝説とも関わりがあります。妙見信仰は正式には「北辰妙見信仰」といい、天にあって動かない星である北辰（北極星）に対する信仰でしたが、次第に北斗七星をも含んだ信仰へと変化していきました。星田地区の妙見という地名は、この妙見信仰に基づくものです。

しらみず 白水付近の谷になっている所は、星田の旧集落を流れる中川筋にあたります。付近の丘陵の高い部分から湧き出る水が全現堂池に集まり、中川へと流れていきます。この湧き出た清らかな水が地名の由来だと考えられます。

全現堂池には、浅間神社の小さな祠である「浅間堂」があります。「ぜんげんどう」という名前は、浅間を音読みした「せんげん」が転訛したものだと思われます。



浅間堂

ひもだに 経谷

白水の南にあたり、付近の丘陵に囲まれた細い谷間が経谷です。ここは谷が浅く、大水や土砂の氾濫の心配もなく、清水が湧き出るため、集落の形成や、水田を営むのに非常に良い条件を備えていました。そのため、この谷が開けた場所に、星田の旧集落がありました。



星田妙見宮(上)と
織女石(右)



ほしもり 星の森

傍示川の東側にあり、今ではほとんどが住宅地となっています。そこには小さな森に小さい社があります。その社は石がご神体で、弘法大師にまつわる伝説があります。

伝説では、平安時代の初め、弘法大師が獅子窟寺で修行をしていると、妙見山と光林寺、星の森に七曜星（北斗七星）が降ったと言われています。

星田では、この星の降った3か所のそれぞれの距離が八丁(約870m)あることから八丁三所と言い、星の霊場と考えられています。



星ノ森之宮由緒(上)と
星降石(左)



まちの名に歴史あり

かいと かみがいと 垣内とは、
垣内・上垣内 古代からあ
 とおのかいと る言葉で、農
・外殿垣内 村において
 垣をめぐら
 し、他と区別した土地を指します。主に畑
 地や林などを囲い込んで自分の土地であ
 ることを示しました。

旧星田集落の東側、妙見川に沿って、上垣内・垣内・外殿垣内と名付けられています。垣内が最初にできて、上垣内、外殿垣内の順にできました。外殿には、徳川家康が大坂城を攻める際に星田村に宿泊した御殿があり、その外側に作られた垣内であることから外殿垣内になったという言い伝えがあります。



神祖宮趾之碑

また、この付近には徳川家康が宿営したことを示す「神祖宮趾之碑」があります。

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)



おおたに 星田には大谷という地名が二つあります。
大谷 一つは菖蒲ヶ瀧から東南方向の山一帯を大谷と言います。この付近は谷が続いており、谷沿いに進むと最後には磐船神社の大岩の下に出ます。妙見川の源流で、大きな谷であることから大谷と名付けられました。
 もう一つの大谷は、現在の星田駅南側の交野市と寝屋川市との境にある集落です。この集落は、江戸時代から東高野街道を挟んで東側に星田村、西側が寝屋村に分かれており、江戸時代に村ができる前から存在した古い集落であることを示しています。

こまつ 星田の南側の山間部を妙見川沿いにさ
小松 かのぼり、菖蒲ヶ瀧からさらに南へ600
 ほど谷間を行くと、四條畷市の田原と
 逢坂への分かれ道に出ます。この付近の高地には平安時代から江戸時代前半まで小松寺という大きな寺院があり、それがこの地名の由来です。

平安時代に交野に小松寺が存在していたことは、京都の広隆寺にある資料で確認できます。広隆寺の上宮王院の本尊である聖徳太子像の体内に納められているお経の奥書(お経の作成由来)に小松寺の名前が記されています。

《奥書の内容》

かのえね かのとひつじ いぬどき
 元永三年(1120年) 庚子四月一日 辛未の日戌時(午後8時)に書き始め、同三日 癸酉の日の申時(午後4時)に広隆寺の西門堂の巽間で書き写し終えた。
 執筆したのは河内国交野郡小松寺の住僧兼仁である。願主は僧定海。



木造十一面観音立像

現在、星田寺にある市指定文化財の木造十一面観音立像と、光明寺にある薬師如来立像は元々小松寺にあった仏像で、元禄16年(1703年)に小松寺が廃寺になった際に、星田寺と光明寺に移されたと伝えられています。実際にこの2体の仏像は平安時代までさかのぼる、市内でも非常に古いものです。また、星田妙見宮は正式名称を小松神社と言い、小松寺との関連を伺わせません。

なお、地名の由来となった小松寺は、現在星田9丁目にある法華宗(本門流)小松寺とは異なります。



小松寺跡からの展望(昭和50年)



まちの名に 歴史あり

2年間にわたり、交野の地名を紹介してきたシリーズも、今回で終わりです。今では消えてしまったり、由来の分からない地名もありましたが、これらはすべて祖先が名付け、親しんできた地名です。今ある地名も、大切に残していきたいものです。

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

じごくだに 地獄谷

傍示川と星田新池に挟まれた谷を指します。この谷を主に地獄谷と呼び、谷を流れる川が、星田新池の水源の一つとなっています。

地獄谷という地名は、一般に人が足を踏み入れにくい所につけられます。

星田の地獄谷も、何かしら寂しげで歩いてみると、谷が深く狭く異様な雰囲気を感じ、一刻も早く谷を出たいという衝動にかられるそうです。



星田新池付近から

びんざら かたのやま まぜみ 髪皿・交野山・交見

髪皿は、現在の星田山手1丁目にあたる地域です。髪皿とは、平地や谷間の皿のような窪地、あるいは山の斜面に少しばかりある平坦地を指す言葉です。

星田にある交野山は、「こうのさん」ではなく、「かたのやま」と呼びます。

交見は、交野山から傍示川沿いに伸びる丘陵の終わり部分から大谷橋までです。今は住宅地となり、昔の地形が分かりづらくなっていますが、丘陵の末端で、傍示川の堤防のようになっていました。交見という漢字は当て字で、古くは「ませめ」といい、狭い谷を意味します。

わりばやし 割林

地獄谷の西の尾根を指します。江戸時代中期には、星田の山々のほとんどがはげ山となっており、冬には薪不足に悩まされる状態でした。そこで、林を割り振りして薪を切り出す順番を決めました。割林という地名は、星田の人々が、冬に薪を伐採していた雑木林であったことから名付けられたのでしょう。

あそだに いしのもと こわじ 阿曾谷・石ノ本・強地

交野山の西側と大谷新池の北側との間を阿曾谷と言います。阿曾という地名は、阿蘇山・浅間山のように火山や温泉に関係することが多いのですが、ここでは、「浅い谷」から阿曾谷となったようです。

石ノ本は東高野街道沿いで、阿曾谷の方から西へ大きく広がり、段々に水田が下がってきているところです。洪水で阿曾谷から土砂が流れ、堆積してできた土地かもしれません。

強地は、ほとんどが竹林で覆われていました。竹林は粘土質のところが多く、もともと土に強い粘りがあり、固い土地であるということから名付けられたのかもしれません。

ご愛読
ありがとうございました

